

追 想

―ジャワ島派遣と原住民―

石川県 浅田秀造

大東亜戦争の開戦当時、蘭領印度の攻略作戦には、敵に石油資源破壊の余裕を与えないよう、数方面から急襲的に攻撃し、かつ敵の航空兵力の増派による防衛作戦を防ぐためにも、早期に結末をつける必要があった。

特に石油資源の貧弱な日本、A B C Dラインで石油禁輸で締め上げられ、これが大東亜戦争の発端であったことを考えると、緒戦のジャワ攻略は早期の進攻が要求され、マレー、フィリピン作戦を経て、航空基地の確立と重要な油田地帯であるパレンバンを無血で占領できるかどうか、緒戦における最も重要な課題であった。

このため、陸軍は第十六軍、第三飛行師団、海軍は第三艦隊、第十一航空艦隊が基幹として作戦

に参加、昭和十七（一九四二）年三月九日にはジャワのオランダ軍は全面降伏、早くも翌昭和十八年二月よりジャワは日本軍による軍政に入るという情勢となったのです。

私は、昭和十一年六月、志願により舞鶴海兵団入団、第一期高等科看護術練習生を卒業しました。そのときは「恩賜の時計」を拝受しています。その後、各部署を勤務、先に述べました大東亜戦争もたけなわの昭和十七年八月、上等衛生兵曹だった私は、スラバヤのセ二二三部隊（第百二海軍病院）勤務を命ぜられました。当時のスラバヤは戦火も治まり、華僑らの商店も開かれ、内地では珍しい果物などが現地には豊富で、戦中平穏な時期であったのです。

第百二海軍病院と原住民

第百二海軍病院は市街地から少し離れた「ダルモ」の住宅街にあり、緑の木々に花が咲き、鳥は鳴く、という南方の自然が豊かで、その中にあった小じんまりした元オランダ病院でした。正面に

軍艦旗が翻り、小田一昭軍医大佐以下約百二十人が団結して、前線の傷病兵収容に当たっていました。

日課は朝の点呼から巡検まで大差ない海軍の勤務でしたが、戦地独特の緊張感と軍規は厳しくありました。原住民も多数いましたが、日本軍によりオランダ支配より解放されたことから、彼らにも東洋人としての仲間意識や独立意識が感じられました。

男子は黒い帽子にサロン、女子はブラウスにサロン姿で労働者はほとんど裸足でした。病院の補助看護婦や事務員、電話交換手などは教育があるので靴を履き、ジャワ語のほかマレー語、オランダ語などを達者に話していましたが、日本語は文字も違い難しかったです。

私は理学的治療室と第三病舎室長を兼務し、配下に衛生兵六人と日赤看護婦のほか原住民看護婦二人と雑役夫一人が付けられていました。

写真現像が上手なスコールは頭が低く、素直な性格の青年でしたが、病弱で二カ月後には辞める

ようになりかわいそうでした。第三病舎は「マリア棟」で、原住民の看護婦エスパンヂアはスペイン系の二十三歳の女性でしたが、彼女は気が強く余り親しくはなれなかった。スندگانはまだ新米の十七歳で、目が大きく、インド系の褐色をしており、性格も純粹で明るく、皆とよく親んでいました。時々失敗するのを悩みながらも、日本のことには非常に興味を持っていたのですが日本語は下手でした。

勤務上、必要でしたので、私もマレー語の勉強を通訳の藤原さんに習ったり、街の本屋でインドネシア語の事典を求めて学ぶなど努力しましたが、スندگانたちに日本語のイロハを教えることには苦勞しました。勤務の合間に必要な言葉から少しずつ教えました。一生懸命になるスندگانには特に目をかけたものです。

スندگانとスイツノ姉弟

私はマラリア病舎とX線室室長を交互に勤務して三カ月が過ぎました。ある日のこと、スندگان

「一からマレー語の手紙をもらったのです。私は一夜、辞書を開きながら首っ引きでやっと解説することができました。それには、彼女の身上が記されており、改めて私は彼女の生い立ちなどを知ることになったのです。」

彼女は、スラバヤから約五十キロ離れた山間地のマデウンに生れ、小学校からスラバヤの学校へ進み、見習として第百二海軍病院に入ってきたのですが、手紙には「未熟で失敗を許して下さい。家には父母と弟がいて元気に暮しているが、弟と共に親孝行をしたい」と書いてありました。

私も下手なマレー語で返事を書いて渡しましたら、翌朝「アリガト ゴザマスタ」と挨拶されたのですが、その後、私の読解力を少しは分かってくれたのか、事あるごとに謝罪や悩みを書いてくるようになりました。

ジャワの元旦は暑く、汗だくで、日本の正月など想像もつかぬ彼らは、我々が食べる「雑煮餅」を奇抜な食物だと言っていました。

昭和十八年五月、スندگانは弟のスイツノ君を私に紹介してくれました。マデウンで「みずほ小学校」という日本語学校で勉強している十一歳の凛々しい少年でした。「イツソウケンメイ ベンキョステ ニッポンユク」と繰り返し言っていました。

ちょうど休日の外出日だったので、近くの動物園と新たに造園した日本式公園を一緒に見物に行きました。赤い欄干の橋や池のボート、石の灯籠などを珍しがり、雪の日本や富士山などに憧れていました。

内地帰還と敗戦

昭和十八年十月からスラバヤから約二十キロ離れた山の療養所トレテスに勤務となりました。

戦争は熾烈となりましたが、トレテスの涼しい夜には南十字星が大きく輝き、どこからか「ガメラン」の哀愁の音が聞こえると、思えば遠い日本の父母に飛んだのです。しかし果てしない戦争ではありましたが、一層の「滅死奉公」に励まねば

ならないとの思いは、少しもひるまなかつたので
す。

昭和十九年二月突如、本部復帰の令をうけ、再び先任衛生兵曹として第百二海軍病院の庁舎勤務となつたのですが、「一億火の玉決戦」が呼ばれる昭和十九年五月に、急遽内地への帰還命令が下りました。

庁舎の一同などと、別れの記念写真を撮り、こうして死場所と決めていたジャワを去る日が来たのです。そして前日にはスンダリーとスイツノにも、日本へ帰還することを伝言したのですが、当日、見送ってくれる「帽振れ」の列には当直勤務のために彼女たちの姿はなく、ただ惜別の情を書き記した手紙を、同僚に託してくれました。

帰還する船は、米潜水艦の襲撃を避けながら航行し、それでも無事に一カ月掛かって祖国の土を踏むことができました。

帰国すると、日本は本土決戦が叫ばれていましたが、結局は死に場所も得ず、終戦のときは、人

間魚雷の基地大神突撃隊の基地でした。

光陰矢のごとく半世紀が流れた日本は、世界の先進国として発展しました。そして世界の歴史も、大きく変貌してきました。ジャワなど戦時に迷惑をかけた国々もすべて独立し、発展を遂げ、当時水牛耕作に人力車の道路交通だったジャワも、現代は耕運機が響き、ビルの街に車の列の流れているテレビ放映を見ると、そこに日本人の息吹きを感じるこのごろです。

私は九死に一生を得て、今日があるが、ジャワの別れにもらったスンダリーとスイツノの写真を見つめながら、追憶の念を禁じ得ない思ひです。

今はどこでどうしているか、もう八十歳前後の姉弟老人ではあるうが：会いたいと思う。